

阿波國 すきま 漫遊記

VOL.18 養蚕（前編：催青～配蚕）

【取材・文・写真】 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開発・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだされることがないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 <http://www.sukima.com>



■秋田稚蚕飼育所の掃き立て

蚕の1齢～3齢幼虫までを「稚蚕(ちさん)」と呼ぶ。稚蚕はウイルスなどの病菌に感染しやすく、病気に感染すると繭づくりの時期になって発症して作柄に大きな被害がでる。このため稚蚕飼育は一般の農家は行なわずに農協や専門の施設で行われるのが普通だ。稚蚕飼育の時期に作業者は麩や納豆などは扱ったことができないほどデリケートなのだ。これは卵からかえった幼虫にはじめて桑葉を与えているところ。この作業を「掃き立て」という。

徳島最後の養蚕

今年の夏、たまたま訪れた養蚕農家で徳島県の養蚕が終わりになることを教えられた。養蚕についてはいずれじっくり取材して紹介するつもりだったので、それを聞いたときはショックだった。養蚕はいつから始まったかわからないに古い古い技術で、おそらく徳島では古墳時代に忌部氏が始めたのではないかと思う。その後戦乱などで途絶えた時期があったとはいえ、千数百年以上続いた産業が、今年で終わろうというのだ。そこで急ぎよ最後の養蚕の様子を取材することにした。

養蚕は素朴に言えば、蚕に桑を食べさせて繭を収穫するというものだが、実は多くの職業がかかわる複雑な産業だ。蚕が卵から繭になるまでの様子を前後編2回にわけて紹介しようと思う。

蚕種製造業

昆虫は成長が早く、食べる植物の量に対して生産できるたんぱく質の比率が高い生物だ。その性質を利用して、有益な物質を量産する手法を最近では「昆虫工場」と言ったりする。養蚕はまさに昆虫工場なのである。蚕のより良い品種を作り出すためには時代の先端を行くバイオ技術が研究されてきた。2種類の原種を親にして生まれた子、一代かぎり優れた性質を持つという「一代雑種(F1)」をご存知だろうか。現代では牛や豚などに応用されている。この一代雑種が初めて実用化された動物が蚕だった。当然一般の農家には不可能な技術で、蚕の品種管理と卵の生産をしたのは専門の蚕種製造業者だった。残念ながら徳島県には蚕種業者は残っていないが、徳島市国府町には



▲徳島市国府町・蚕の館(山野蚕種製造所)
放射線による突然変異の研究を全国に先駆けて行なった先端的な蚕種業者だった。いまは博物館・蚕の館として当時の道具などを展示している。

山野蚕種製造所の建物が残っており往時の様子をしのぶことができる。



▲山野蚕種製造所・貯桑室と氷室

自然の状態では春に1回しか生まれない蚕を年に何度も飼育するために、卵を疑似的に冬の気候にさらさなければならぬ。電気冷蔵庫がない時代には水を運び込んだ氷室で卵を保管した。



▲山野蚕種製造所・産卵室

原種は委託した農家で育成し、この産卵室で交尾させて卵を生産した。ミスで原種が混ざることがないように、原種ごとに離れた地域の農家に委託するという。蚕種会社の建物は全国的にも遺構が少なく、貴重な文化遺産だ。

蚕種業者が卵を冬眠から目覚めさせる作業を「催青(さいせい)」という。卵からかえる時間がまちまちだと、その後の脱皮や繭づくりのタイミングが大きくなりずれてしまう。農家に蚕を届ける日は決まっています。その日から逆算して半日の狂いもなく卵がかえるように調整するのだ。

稚蚕飼育所

蚕種業者が製造した卵は稚蚕飼育所という施設に送られる。稚蚕とは、蚕の1齢幼虫から3齢幼虫までを言い、この時期は蚕が病気にかなりやすいため、農家ではなく特別な施設でまとめて飼育するのである。稚蚕飼育所はかつて県下各所にあったが、最後の年には東みよし町の秋田稚蚕飼育所が1軒残



▲稚蚕(1齢幼虫)

卵からかえった直後の1齢幼虫の蚕。色は黒っぽく、毛が生えていることから「毛蚕(けご)」とも呼ばれる。この幼虫が約24日間で1万倍の大きさに成長して繭をつくる。

るのみとなった。

稚蚕飼育所での飼育は2齢幼虫までで、3齢幼虫から農家で飼育される。(他県では3齢の途中で脱皮の直前に活動が止まるのでそのタイミングをみはかかって農家に配達する。この作業を「配蚕(はいさん)」といい、稚蚕飼育所の最後の大事な事となる。



▲美馬市穴吹町・稚蚕共同飼育所

穴吹町にいまも残る稚蚕共同飼育所の建物。この建物は比較的新しくできたもので、「大部屋方式」という方式の飼育所だったと思われる。



▲東みよし町・秋田稚蚕飼育所の飼育室

押し入れのような小部屋を電熱線で加温してこの中で稚蚕を飼う。この方式を「土室電床育(どむろでんしやういく)」という。養蚕飼育の技術を伝承してきた秋田稚蚕飼育所は全国的に見ても注目すべき存在だ。



▲秋田稚蚕飼育所の付属農園

養蚕も県内ではほとんど見かけなくなった。現代では稚蚕には殺菌された人工飼料を与えるのが一般的で、天然の桑葉による稚蚕飼育の技術を伝承してきた秋田稚蚕飼育所は全国的に見ても注目すべき存在だ。



▲最後の配蚕

稚蚕は「蚕座紙」という紙でスマキにされて配達される。農家に届く日時はあらかじめ決まっていて、この配蚕の時間帯にすべて蚕の活動が止まるように育てるのが、稚蚕飼育所の技術のみせどころである。